

## 仏教文化公開講座講演録要旨

### 生死出づべき道を求めて

満井秀城

親鸞聖人の時代と今の時代とを比べ、何が一番違っているかを考えたとき、「生死出づべき道」が課題になりにくいのが今の時代だと思っています。親鸞聖人の時代、すなわち日本中世の時代は、善きにつけ悪きにつけ、「生死出づべき道」が課題になっていた時代です。「悪しきにつけ」と言ったのは、例えば、年貢を払わないと地獄に落ちるといふ無茶な因果論で支配していました。今で言うと、税金を払わなければ地獄に落ちるといふ理屈で、そんなことを信じている人は居ないでしょう。むしろ、地獄も極楽も、誰も見てきた者は居ないと済ましています。

科学が発達したから、地獄も極楽も信じられなくなったのではなく、お釈迦様の時代もすでに、自分の目にするもの以外は信じないという考え方がありました。そのことは、『涅槃経』という経典から知ることができます。阿闍世は、王子だったときに父親の頻婆娑羅王を死に至らしめ、自らが王になりました。晩年、良心の呵責にさいなまれ、背中にできものができて、悪臭を放ち、心身ともに疲弊します。医師や薬師を手配しますが、心の病から来

ていると判断します。心の病とは、父親を殺し、地獄行きから逃れられないという恐怖心です。この苦悩の解決に、六師外道と言われる当時の知識人たちを招きます。「外道」とは、今の感覚では、道を外した人のように、悪いイメージですが、元はお釈迦様以外の道を示した人というぐらゐの意味で、当時の知識人たちと考えてください。彼らは、どんな解決の道を示したでしょうか。

最初の家臣、月称は、「王様は地獄行きの苦しみにさいなまれていくようですが、地獄といっても、誰も見てきた者はおりません」と進言します。これを聞いて、「そうだった。何をつまらないことに苦しんでいたんだ」と心が晴れたかというのと、決してそうではありません。だから、さらに次々と六師外道を招くのです。どの論理を聞いても得心がいかず、最後に耆婆と言う家臣の勧めに応じ、お釈迦様の元に行きます。そこで、お釈迦様の月愛三昧という手だてによって救われる。『涅槃経』はこの経緯をモチーフにしています。つまり、お釈迦様の時代においても、自分の目にするもの以外は信じないという考え方があり、しかも、不安や恐怖は、この理屈では解決できないことが明確なのです。

もう一つ例を挙げます。曇鸞大師の『論註』では、「蟪蛄は春秋を識らず」という中国の故事を引いています。「蟪蛄」とはセミのことで、これは固有名詞ではなく普通名詞です。「春秋を知らず」は「春、秋を知らない」と書きますが、一般には一年全体のことを言います。セミは七年から十年の間、幼虫として地中で過ごし、ある年の夏に地上に出て、一週間ばかりミンミンと鳴いて一生を終えます。つまりセミにとって、地上の世界は夏しか知りません。春、秋、冬を知らないのです、夏以外はないと思っただけでしょう。しかし、私たち人間は、春や秋や冬があることを知っています。これを私たちに置き換えますと、五十年か百年というわずかな期間で、セミがミンミンミンなら、私たちはカネカネカネと鳴いて死んでいくのです。曇鸞大師は、「それではもったいない」と言います。そ

して、「この虫、あに朱陽の節を知らんや」と続きます。「朱陽」とは、夏のことです。セミは夏なら知ってるだろうと思うかもしれませんが、一年のなりわいを知らないため、夏の夏たる所以を知りません。それが、「この虫、あに朱陽の節を知らんや」です。これを私たちにスライドすると、セミが地中から地上に出てきたように、私たちはこの人間境涯に生を受けました。せっかく人間に生まれたのに、何のためにこの世に生まれてきたのかを見失っている。それが、「この虫、あに朱陽の節を知らんや」です。

私はいいかげんなものばかり書いていますが、一応研究者の端くれとして、裏を取りに、自宅の書庫へ向かいます。ところが、書庫に入った途端、何をしに来たのかを忘れてしまうことが頻繁に起こるようになりました。本を探しに来たはずで、本棚を上から下から右も左も見るのでありますが、思い出せません。次の棚をハンドルでくるくる回しても、思い出せません。そこでまた書齋に戻ると、「そうそう、あれを調べに行つたんだ」と思い出すのです。わざわざ京都女子大まで来て、私の愚かな話がしたいわけではありません。書庫に入った途端、何を探してきたか分からず、書齋に戻って思い出す、今の状況を思い浮かべながら、次のことを聞いてください。私たちは、人間境涯という部屋に入った途端に、何をしにこの人間境涯に生まれてきたか分からなくなって、右往左往ばかりしている。せっかく人間に生まれながら、その所詮が分からないままの在り方が、「この虫あに朱陽の節を知らんや」です。この朱陽の節を知るには、「知るもの、これを言うのみ」とあります。分かっている人に聞くしかないのです。

山で道に迷ったと想像してください。私も中学生の頃、広島県の田舎に生まれ、同級生と近くの山に遊びに行きました。遊び過ぎて、日が陰ってきたので急いで帰ろうとしましたが、近道しようとしたのが失敗のもとです。方が角がさっぱり分からなくなりました。そのときは、人家の明かりが見えましたが、今から言う例えは違います。山で道に迷ったとき、遠くに人影を見つけ、これで助かったと思い、一目散に駆け寄ります。息を切らしながら、「助

かりました。道に迷って困ってたんです」と話しかけても、「僕も道に迷って困ってたんです」と言われたのでは、何の解決にもなりません。帰る道が分かる人に出あわないと解決にならないのです。

私たちが、迷いから抜け出るには、分かっている人に聞くしかありません。凡夫はいくら集まっても、凡夫は凡夫のままです。

今、二つ例を挙げました。私たちはとかく、自分の目にするもの以外は信じません。でも、「見えないこと」と「存在しないこと」とは、決して同義ではありません。目には見えなくても実在するものは、いくつもあります。昔の人は、風に例えました。風は、直接目に見えませんが、窓の外に、木々の枝や葉が揺れていることで、「今日は風が吹いている」と分かります。目には見えなくても、働きによって知るのです。あまりいい例えではないかもしれませんが、十年余り前、福島で大きな原発事故が起こりました。放射線は見えませんが、目に見えないものになぜ心配をするのかと暢気なことは言えません。放射線は見えずとも、放射能の働きとして現実に害を及ぼすのです。

本願力も、目には見えません。大体、「力」自体は、直接目に見えるものではありません。二の腕を曲げると力こぶはできますが、これは力そのものではなく、筋肉が曲がって膨れただけです。ここに演台があります。私がこの演台を動かそうとしても重くて動かない。そのとき、誰かが簡単に動かしてくれました。すると、この人は力持ちだと分かります。つまり、力とは、力そのものが見えるのではなく、働きによって知られるのです。では、本願力はどうか知られるか。私の場合、この口はろくな口ではありません。人の悪口を言うのが大好きで、あるいは、すぐ愚痴をこぼします。それが、なぜか時折、お念仏が出るのです。これは、私の不実な心から出るはずがない。出るのはお念仏が出てくださるのは、本願力の働き以外にはあり得ないと思うのです。

私たちの目は、そんなにいいものではありません。他人の悪いところはよく見えるのに、自分の悪いところは気

がつきません。耳もそうです。他人の悪口はうそでも面白いですが、自分の悪口は本当でも腹が立つ。これは、目や耳が自分中心の働きをしているからです。昔の説教に、目と耳は仲が悪いというネタがありました。目と耳が、お互いに我を張る説教ネタですが、本当は仲がいいのです。証明しましょう。もう一時間ぐらい話しました。そろそろ睡魔が襲ってきます。まず、目がストライキを起こします。「もう耐えられん。どうやら大事な話らしいんだが耐えられん。私は寝るから、すまんが耳さん。あんた、よう聞いていてくれ」と目が耳に言う。すると、耳は、「目さんや目さんや。そんなつれないこと言うてくれるな。長年連れ添ってきた仲やないか。あんたが寝るなら、わしも寝る」と、耳も休むのです。

「目に見えない」ことと「存在しないこと」とは同義ではないと言いました。「生死出づべき道」というタイトルに戻しますと、なぜ課題になりにくいのかを、別の視点で話します。それは、「自分が迷っていることに自覚がない」ということです。

「生死」とは、生まれては死に、生まれては死にを繰り返すことで、これを輪に例えるのが、「正信偈」の「生死輪転の家（生死輪転家）」です。仏道は、この迷いの輪から抜け出ることが目的です。このことを考えるのが今回の課題です。でも、「自分が迷っている」自覚がなかったら、迷いの輪から抜け出る意志は起こりません。自分のことは自分が一番よく分かっていると思っているからです。少し体の調子が悪くても、いつもの風邪だと、自分で大体分かるのかもしれない。でも、自分のことは自分が一番よく分かっているとも限りません。例えば、酔っぱらった人ほど、「私は酔っていない」と主張します。広島弁で言うと、「わしや、酔うとらんけえの」となります。こうなったら、もう、この人に酒を勧めてはいけません。酔っぱらっている人ほど、自分が酔っていることに気がかないのです。

他人だけではありません。私も「自分は若い」と思い込んでいます。同級生に会っても、彼らの変わり果てた姿を見るにつけ、「自分は若い」と思っています。また、研究所の同僚たちと近くのお店に行ったときも、私が店員さんに、「この中で誰が一番若いと思う」と聞くと、しつげがよくできていて、「誰が一番若く見える?」と聞く人は、「自分がそう言ってもらいたい」と解っているようで、「それはお客様ですよ」と満面の笑みで言ってくれます。「そうか。正直ない子だね。じゃあ、もう一本」となります。

同級生と比べて若いと思えますし、周りの女の子もそう言ってくれる。調子に乗っていると、十年余り前、研究所に着任してすぐに、ストレス性十二指腸潰瘍になりました。朝、気分が悪くて目が覚め、のたうち回るほどでした。吐いたら楽になると思って、トイレで吐いたら、便器が真っ赤なのです。これには仰天して、妻に車で送ってもらって、近くの消化器系病院に行きました。胃カメラを飲んだり、エコーをかけたたりしていると、ピーポーピーポーと救急車の音がします。誰かここに搬送されるのかと思ったら、私が搬送される救急車でした。総合病院に運ばれ、ここでもまた検査を受けました。部分麻酔ですから、声が聞こえます。医者たちが、「これは腸閉塞だな。腸閉塞の典型だ」などと言っています。「これは大変だ」と思いました。眠くなったのか、うとうととしてしまい、夕方、目が覚めました。するとベッドの足元に人影があるのです。私の主治医でした。「大変でしたね」とねぎらいの言葉をかけてくれた後、「あなたはもう若くないんですから、無理をはいけません」と言われました。今まで知らなかったわけではありませんが、他人と比べて若いと思っていたら、若くないということに、本人が気付いてなかったということです。

実は、皆さんも同じなのです。自分の明日が本当に分かっている人はおりません。自分のことは自分が一番よく分かっているつもりでも、「迷っている自覚がない」だけなのです。

もう一つ。今の時代は、少なくとも物質的には便利で快適ですから、「信心や念仏などなくても、何の不自由もない」という風潮です。二年以上が経ち、新型コロナ感染症で不便と窮屈を味わっていますが、それでもなお、便利で快適ですから、「今更信心や念仏がなくても、何の不自由もない」という考え方が支配的でしょう。

どういうときに不自由と認識し、何を自由と考えますか。通例、自分の思いどおりになることを自由と考えますね。年をとってくると、若いときは簡単にできたことが思うようにできなくなる。そういうとき不自由を感じます。反対に、若い頃は元気があり余っているのに、学校の規則が厳しい、家庭のしつけが厳しい。こういうときも不自由を感じます。尾崎豊と言う歌手が亡くなって、もう三十年ぐらい経ちます。彼が、「卒業」という自作の曲を歌っていました。その最後の決め台詞が「支配からの卒業」です。校則に縛られる閉塞感を歌い、多くの若者の共感をえました。つまり、「自由」とは、縛られないときに感じるのです。

このように、自分の思いどおりになることを自由と考えるのが普通だと思えますが、仏教では、自分の思いどおりを自由とは言いません。なぜかというところ、自分の思いどおりは、欲望という煩惱に支配されている状態だからです。本当の自由とは、煩惱の支配から抜け出ること、これを解脱や涅槃と言ってきました。

仏教では、本当の自由を、例えば、「六神通」と言う概念で表します。その中に「漏尽通」があります。「漏れる」とは煩惱のことで、煩惱が漏れ出している状態が私たちです。「尽」は、なくすという意味です。ですから、「漏尽通」は煩惱をなくす神通力のことです。今の私たちに置き換えてみると、大きな力を得たととしても、煩惱の手先になつた途端に、それは災いをもたらすのです。現代の科学の恩恵は大きく、そのおかげで便利で快適です。ところが、この科学も、煩惱の手先になつた途端、人々に災いをもたらします。

ノーベル賞で有名なA・ノーベルはダイナマイトを発明しました。それまでは人力で山を掘っていたので、山が

崩れたり、人が転落したりして、何人もの命が失われました。それが、ダイナマイトの発明で、事故で亡くなる人は激減しました。ところが、このダイナマイトを武器に転用すると、人々の命を奪い、恐怖心を与えるようになり、ノーベルは心を痛めました。ノーベル財団に平和賞があるのは、そういう意味も含んでいるように思います。大きな力でも、煩惱の手先になった瞬間、災いの元になるのです。煩惱からの解放こそが、本当の自由です。

オランダの哲学者に、B・スピノザと言う人が居ます。彼は近代西洋哲学の父と言われたR・デカルトに猛烈に反対し、デカルトの論客だった哲学者です。スピノザは石に例えていて、「スピノザの石」と言われています。石は自分自身では一歩も動くことができません。しかし、誰かが放り投げたとき、今まで自分の力では一歩も動けなかったのに、今や空中を飛遊し、自分は自由になったと思っているかもしれない。ところが実際は、放り投げられた瞬間、一定時間のうちに一定地点に落下することが不可避です。つまり、スピノザは、石が自由だと思っているのは錯覚にすぎず、私たち人間も、自分の思いどおりが自由だと思うのは、錯覚にすぎないと言うのです。西洋哲学は、キリスト教の神学に基づいています。そのキリスト教神学では、私たちの自由意思には神の意思が宿ると見ます。だから、多数の民意には神の意思が宿るとして、多数決が成立するのです。念のために言うと、私は民主主義を否定するつもりは毛頭ありません。しかし、依って立つ根拠の違いは知っておくべきだと思のです。先ほど言ったように、凡夫はいくら集まっても凡夫のまま、決して神の意思も仏の意思も宿りません。「知る者これを言うのみ」。分かっている人に聞くしかないのです。

「生死出づべき道」が課題になりにくい理由には、このような幾つかの点が思い当たります。「生死出づべき道」が課題にならない人には、悟りも浄土も響きません。自分が迷っている自覚がないと、迷いから抜け出る意志は起りません。浄土が分からない人は、親鸞聖人の「現生正定聚<sup>げんしょうしやうじやうしゆ</sup>」の意味や意義の大きさも理解できません。負の連



鎖になります。「生死出づべき道」が課題にならないことが起点になって、さまざまな課題が起こっているわけです。「現生正定聚」について、清基先生が「『現生正定聚』は大学の合格通知みたいなものだ」と譬えておられました。私の四男が大学入試の頃だったので、鮮明に覚えています。入学試験は二月の中ごろ、発表は三月上旬だったと思います。彼は合格通知をもらった途端、バイオリンをギコギコ弾きだしました。大学受験を控え、好きな音楽もできず、勉強も得意な文系科目だけでなく、苦手な理数系もしなければいけないので、大学に入ったら、好きな学問を思い切りやりたいし、学生オーケストラにも入りたい。ずっと、そう思っていたのでしよう。だから、合格通知を貰った途端、バイオリンを弾き始めたのです。入学式は四月初め。つまり、彼はまだ大学生ではありません。なのに、心は既に大学にありました。「現生正定聚」のありがたさは、心は既に浄土にあって、それを喜べることです。浄土が響かない人に、「現生正定聚」が響くはずはなく、負のスパイラルになるのです。

親鸞聖人の時代と今とでは何が一番違っているかを考えたときに、「生死出づべき道を求めて」という題を拾いました。親鸞聖人の求道の原点は何だろうかという話に展開してみます。

親鸞聖人は、非常に精力的に、たくさんのお書物を書かれました。「教行信証」は大部なもので、読むだけでも大変で、書くとなると、とんでもなく大変だと思えます。他にも、さまざまな書物を、晩年に至るまで精力的に書かれました。しかし、親鸞聖人の目的は一つ。「仏徳讃嘆」です。「仏徳讃嘆」が目的ですから、ご自身のことはほとんど出てきません。「ほとんど」と言ったのは後ほど言います。

親鸞聖人の求道の原点は何かを考えたとき、ご自身の著作からうかがい知ることができません。となると、歴史学の史料論では、補助資料として、同時代の近しい人たちの存在が浮かび上がります。近しい人たちに語られたことがあるのではないか。今風に言えば語録です。そう考えると、身近な人として真つ先に思い浮かぶのは伴侶の恵

信尼です。そして、先ほど所長が紹介された、親鸞聖人の言葉を直接聞くことのできた唯円と言う弟子も注目されます。これらは、補助資料として有効でしょう。

恵信尼が書いた手紙が、実は現存しています。大正十年ごろ、本願寺の蔵の中から偶然に発見されました。ずっと保存はされていましたが、ミミズのような字で判読できず、恵信尼の手紙だと誰も分かりませんでした。しかし、大事に残っていました。今のような断捨離だったら残らないです。残ったのは大したものです。よく分からないけど大事にして来たのです。それを、鷲尾教導先生が判読し、恵信尼の手紙だと初めて分かったのです。

明治に入り、西洋の近代的な史料論が入ってくると、まず、信用できるのは同時代のものということになります。しかし、「親鸞」という名前が、同時代の記録に見つかりません。そのため、親鸞聖人は実在せず、覚如上人が架空の人物をでっち上げたのではないかと、半分本気で疑われた時代がありました。それに対して、当時東京大学史料編纂所の辻善之助先生が、筆跡鑑定という手法で、「親鸞」という書名のある『教行信証』などの書物を集め、自筆本の存在をもつて、親鸞聖人の実在を証明しようと試みました。それでも、不十分な点が残り、そういう中で発見されたのが「恵信尼文書」でした。伴侶の恵信尼が、夫の親鸞聖人のことを書き留めていたわけです。これによって、親鸞聖人の実在を疑う人はいなくなりました。

親鸞聖人の晩年をみとつたのは末娘の覚信尼でした。覚信尼は、越後に居たと考えられる母の恵信尼に、聖人が亡くなられたと手紙を送りました。それが届くのに一カ月ぐらいかかったようです。恵信尼は、その返答を娘の覚信尼に送りました。残っているのは、その返事のほうです。覚信尼から恵信尼に宛てた手紙は見つかってなく、あるいは、もう残っていないかもしれません。その手紙には、「あなたのお父さんはね」と、さまざま思い出がつづられています。その中に、「後世の助からんずる道、生死出づべき道を求めておられた」という記述が出てきます。

私は、これが親鸞聖人の原点ではないかと思ひ、今回の公開講座のタイトルもこれにしました。

求道の原点について長々と話しましたが、結論は何かが気になると思ひます。先ほど、ご自身のことはほとんど書かれていないと言いました。「ほとんど」と言ったのは、実は、求道の結論と思われる記述はあります。それは『教行信証』『化身土巻』の「後序」と言われる部分です。そこには法然聖人との出あいの感激がつづられています。『選択集』の書写を許され、お姿の書写を許されたり、さまざまな感激の思ひ出を記す中に、「建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」という語があります。「辛の酉」とは十干・十二支のことです。甲子園球場の「甲子」も十干・十二支の組み合わせです。十干のうち五つ、十二支は十二。ですから、「十二×五」の「六十」という暦が、カレンダーとして定められています。六十才で「還暦」と言うのは、元の暦に戻ってくるということですね。

日本の元号で、六十年以上あるのは昭和だけです。昭和は六十四年までありますが、それ以外の元号は全て六十年以内ですから、十干・十二支が分かれば、何年になるかが、カレンダーとして分かる仕掛けになっています。カレンダー以外に用いてはいけません。蛇の年は執念深いか、「ひのえうま」だとか、占いなどに用いると、予断や先入観の元になります。「占いはファッション」と言う人も居ますが、いじめや差別の元凶になりかねず、ファッションなんて軽いものでは済まないです。ともかく、カレンダーに過ぎません。建仁年間の「辛の酉」は、機械的に当てはめると建仁元年と出ます。建仁元年は西暦一二〇一年で、親鸞聖人ご誕生の一七三年を引き算すると二十八で、満二十八歳、数えの二十九歳。恐らく多くの人がピンとくるでしょう。親鸞聖人は九歳のとき比叡山に登り、二十年の修行ののち、六角堂の参籠というきつかけを経て、法然聖人の元に赴かれました。まさにその年が、「建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」なのです。親鸞聖人にとって特に忘れることのできない感激だったと思われまます。

それまでの日本仏教は八宗兼学が常識でした。奈良時代の南都六宗と平安時代の天台・真言二宗を合わせて八宗です。これらを修めることが日本仏教の常識として、誰も疑う者は居ませんでした。法然聖人は、それに疑問を抱かれたに違いありません。なぜかというところ、法然聖人は「偏依善導一師」として、自身の師匠は、所も時代も遠く離れた、唐の善導大師お一人だと言っておられるからです。つまり、法然聖人にとって、恩師と呼べる人は、周囲におられなかったということです。

日本に伝わった仏教は、大乘仏教です。それまでの上座部系仏教は、自らが悟り、その後で他者を救おうと考えていました。例えば、川で溺れている人がいても、自分が泳げないと助けられません。これには一定の道理があります。しかし、致命的な欠陥があります。目の前で溺れているのに、今から練習してたのでは間に合いません。目の前で人が溺れているのに、何もせず、ただ見過ごして、これで本当に仏教と言えるのか。そう思う人が出て来たに違いありません。それが大乘仏教の始まりだと想像しています。大乘は「大きい乗り物」と書きます。上座部系の人たちを「小乗」と言ったのは、「上座部系の教えでは一部の人しか救われぬ。乗り物が小さいではないか」と。ただ、これは、大乘から見た呼称なので、今日では「小乗」という言い方は一方的としてあまり使いません。大乘仏教は、全ての人が救われることを目標にしました。その最も典型的、最も完成された形が阿弥陀仏です。「若不にやくふ生者、不取正覚」。衆生が浄土に往生しなければ、自分も悟りを開かない。つまり、阿弥陀仏は、自身の悟りよりも衆生の悟りを優先されたのです。それが大乘仏教の基本精神で、全ての人が等しく救われていくのが大乘仏教です。ところが、大乘仏教の日本での在り方は八宗兼学です。法然聖人は、これでは全ての人が救われる道ではないと思われたに違いありません。そこで書物をたどり、出あったのが善導大師の『観経疏』のお言葉でした。念仏一つで全ての者が救われる。この「称名正定業」に出あって初めて、課題の解決が見い出せたのでしょうか。

親鸞聖人も、ご自身の苦悩とともに、法然聖人と同様の課題を抱かれたと想像します。しかも、私が言うのも失礼ですが、親鸞聖人はすごいと思います。二十年修行をするうちには、十年、十五年が経つときがあったわけですが、十年修行し、十五年修行したら、少しは悟りに近付いたと思っても不思議はないはずですが、親鸞聖人は決してそう思いませんでした。あくまで「煩惱具足の凡夫」の立ち位置に徹しました。私なんかは、少し勉強したら少し賢くなった、少し聴聞したら少し分かったという錯覚を起こしますが、親鸞聖人は決して錯覚しませんでした。

法然聖人の元に赴いたのが建仁元年、二十九歳のとき。その後、越後に流罪となり、法然聖人の元ではたった六年でした。しかし、この六年間は、今まで自分が課題と思っていたことが、次々と劇的に氷解していったことでしょう。ところが、越後流罪となり、当初は不本意な思いだったと想像されます。それまでの親鸞聖人は、法然聖人の元で念仏が喜べ、充実したときだったと思います。それが、越後に赴き、現実に苦しみや悩みを抱えた人々を目の当たりにし、自分が喜んでさえいれないでは済まされないことに気付かれたと思います。そこに、伝道の意義を見出され、流罪赦免の後も関東への道を歩みます。そして、伝道する中で、自身の教学的基盤に、不十分さを感じられたのか、資料的に最も環境のいい京都に帰洛されたのではないかと考えています。これは私の想像にすぎません。先に、「建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」の言葉を紹介しました。親鸞聖人という方は、言葉に非常に厳密です。これでもかと言うくらい極めて厳密に言葉を扱われます。「雑行」の対義語は、論理的には「正行」です。「正雑二行」というように、対義語は正行ですから、「雑行を棄てて正行に帰す」のほうが正確なはずですが、ところが、親鸞聖人は、「本願に帰す」と語らざるを得なかったのだと思います。法然聖人に出あうことで、求道の結論を、本願への出遇いと気付き、その感激が今のお言葉だと思えます。いろんな歴史的経緯はありますが、親鸞聖人の生涯を、ご自身の心の有りようからたどってみると、『生死出づべき道』を原点とし、本願への出遇いが

結論だった」と表現できると思います。

本願に出遇うことの意味は、私たちの在り方が根底から引つ繰り返ることです。自分のしてきたことに意味を認めなくなるのは、雑行の思いです。少し勉強したら、少し聴聞したら、と錯覚を起こしがちですが、決してそうではありません。真实性の根柢は、私の側にはなく、仏の側にしかない。本願に出遇うことによって、自らの迷妄性がいよいよ明らかになるのです。光にあうと、光の強さによって影も濃くなります。本願に出遇って初めて別の世界が開かれ、自分の生き方が百八十度転換するのです。

例えば、「他力本願」は、浄土真宗では重要な用語ですが、昨今は、いちいち相手にしてたらきりがないくらい誤解がはびこっています。プロ野球では、相手にマジックナンバーがつくと自力優勝が不可能になり、「あとは他力しかない」。そういうときに「他力本願」と使うのです。もとは多分、「他力本位」というくらいの意味だったと思います。自力では不可能となり、他人に頼るしかなかったとき、「他力」と来たら、「他力本願」という用語があまりにもよく知られていたから、反射的にそう言ってしまったのが、誤解の出発点ではないかと想像しています。「他力本位」と「他力本願」は意味が全然違います。百八十度違います。私たちのすることは虚妄分別で、私の側で真实性が語り得るとすれば、それは仏力・他力が働いているところにおいてのみです。先ほどの例えで、私の口に本願力が働いている有りようについて、悪口や愚痴ばかり言っている口から念仏がこぼれることもあると言いました。あるいは、困っている人を見かけたとき、優しい言葉がかけられることもあります。打算やおべんちゃらではなく、本当に困っている人を見かけたとき、なぜか優しい言葉をかけることもある。それは、本来、私にはないものです。自分中心の思いしかない私が、優しい言葉をかけることがあるのは、本願力によって育てられたとしか言いようがありません。

四十八願のうちの第三十三願に「触光柔軟の願」があります。光に出あった者は柔軟になるといいます。なぜかという、私は、第十二願、「光明無量の願」に注目します。その第十二願成就文には「十二光」があり、その中に「清浄光」・「歡喜光」・「智慧光」とあります。「清浄」は清らかな光、「歡喜」は喜びの光、「智慧」は智慧の光です。これは私たちの「貪欲」と「瞋恚」と「愚痴」に向けられていると思います。例えば、喜んでいるとき、同時に怒りは起こりません。さつきまで機嫌が良かったのに、急に怒り出すことはありませんが、喜んでいるときに同時に怒りは起きません。ですから、歡喜の徳を届け続け、私たちの怒りの心を少しでも鎮めようとしてくださるのです。つまり、「清浄・歡喜・智慧光」は、私たちの「三毒の煩惱(貪・瞋・痴)」に向けられていると思うのです。その次が「不断光」。コロナワクチンでも、半年か一年ぐらい経ったら、抗体が減ります。もちろん、免疫の記憶はしており、ウイルスが入ってきたら、すぐに抗体を作り始め、重症化はしにくいと言われていますが、三回目を打ったほうがいいとも言います。インフルエンザも毎年打ったほうがいいと言います。インフルエンザの場合はA型、B型という型の違いもありますが、新型コロナウイルスでも、変異株が出ることもあり、効力も落ちてきますから、ブースター接種をしましょうということになるようです。

阿弥陀仏が「不断光」として断えず届けねばならなかったのは、私たちは煩惱が次から次に湧き起こってくるからです。そういう煩惱成就の身ではありながら、阿弥陀仏の光に出あい、それが根源となって、私の中に本来は出るはずのなかった優しい言葉や穏やかな表情が出てくることもある。打算や不実な心によってではなく、自ずとそういうことが起こる。それは本願力によってしかありません。

私たちは、臨終の一念に至るまで、煩惱が消えることはありません。ですが、私たちは阿弥陀仏から光のお徳が届けられています。それが、御消息にある「阿弥陀仏の薬」です。そこには、本願に出遇った者ならでは、主体

の変革があるのです。自分の煩惱をあるじとするのではなく、念仏をあるじとするのです。

法然聖人の言葉に、「煩惱を客人まぢひととし、念仏をば心の主あたとせよ」とあります。煩惱は死ぬまで居続けますが、「客人」にすぎません。煩惱は客人にすぎず、念仏をあるじとするのです。多分、これを承けたのが、蓮如上人の「弥陀を頼めば南無阿弥陀仏の主ぬしになるなり」だと思います。

私たちは、自らの不実な心があるじとするのではなく、南無阿弥陀仏をあるじにした生き方をすべきで、これが「他力本願」です。仏力・他力が自らの主体になることをお示しくくださったのです。

最後に蓮如上人のエピソードを一つ申し上げ、時間を終えたいと思います。

大和国、今の奈良県に、了妙という篤信の老婆がおり、糸を紡ぎながらの日暮らしでした。蓮如上人が大和に赴いたとき、旧知の了妙に声をかけます。「了妙よ、念仏申しているか」。すると、了妙は糸車を引きながら、「はい、こうして糸を紡ぎながら、念仏申させていただいています」と答えます。すると、蓮如上人は、「そうではない。念仏申しながら糸を紡ぎなさい」と諭されたのです。主客を間違えてはいけません。心のあるじを南無阿弥陀仏として歩ませていただくのが念仏者です。

長時間お聞きいただき恐縮でした。拙い話ではありましたが、親鸞聖人の求道の原点とその結論を、「生死出づべき道」という言葉を手掛かりに、少しばかりひもといってみました。これに懲りず、また来年も、あるいは別の機会でも、さまざまな場で、京都女子大の講座にご縁を結んでもらえたらありがたいです。

受付日 令和四（二〇二二）年三月十日 採用日 令和四（二〇二二）年十二月二十五日

〈キーワード〉

求道 迷い